
東方操魂道

サネキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方操魂道

【Zコード】

N1014Z

【作者名】

サネキ

【あらすじ】

目が覚めたら眼の前に人の顔があった。そしたら、なかなかヤバい能力を持っているとわかった。人でなくなつたと気づいた。泣いた。そんな化物が日本をあつちへふらふらこつちへふらふら。そこで幻想郷でのんびり暮らす物語

真っ黒、誕生（前書き）

物書き初心者がやつひやつた作品

駄文ですがよろしくべりいべり

真つ黒、誕生

目の前に人の顔がある。絶望してゐるような、苦悶の表情だ。目を閉じる、開ける変わらない。もう一度閉じる。あれ？何だ、瞼の裏に、今、立つてゐるのが俺だと認識するのに納得してしまつ、あらゆる情報が映る。 あああ！頭が、割れそうだ。痛い、痛い、吐きそうになる。俺は、人間だろ！何だよ！これ！

はあ、はあ、落ち着けとりあえず整理しろ、頭の中をわかりやすく綺麗に……ああ、認めるしかないじゃないか俺は人間じゃない。そもそも手を見ればわかる人間のものじゃない。ぼやけて見えるのに真っ黒だ。人間じやくなつた俺は一体何に、くそつまた流れてくる……そうアレだ昔読んだ、蟲の核 蟲みたいな奴だ。もつともアレみたいに集合体じやなく一体だけみたいだがな。そうだ、アレは魂を喰うんだよな。あああ！何だ、また、痛い、違うこれは俺のじやない、目の前の人間のおおお！『ここから出せ。早く早く！早く！頼む出してくれ！…』うるせえええ！

俺は走り出していた気持ち悪くて、辛くて、訳がわからなくて、どうしようもなく、ただ我武者羅に。

踏み出すたびに草が、手を振つてあたつた木が、踏みつぶした虫が、ぶつかつた動物が、そいつら命を魂を勝手に吸つていく、俺が走つたばっかりに、俺の中に入つてくる。

俺は何も無い岩山の頂上にいた。こいつは喰らわなければ弱つていく、そして、死ぬだろう。すまない、俺の中に入つてゐるもの達、すまない、俺が死ぬまで待つてくれ、そしたら、きっと、解放される。待つてくれ。

ああ、俺に次があるのか知らないがこんな記憶は絶対に持つて行き

たくないな。

俺は目を覚ました、周りの風景は寝る前と大きく変わった、岩が土が砂が多くなっている。

ああ、まだ俺はこれなのか『…………きるー』『つるせい、もう黙つてくれ、お願いだ。』今のお前ならできる、やつてくれー』…………どういうことだ、わからない、俺にどうしろってんだ『頭の中で思い浮ぶはずた、使い方が、能力が』【魂を操る程度の能力】…………ああ、これが、なるほど確かにこれならできる。

魂を操るか、周りの草木がなくなるほどに吸つて力が増したからか、それとも俺が魂を喰らうのを拒否したから性質が変わったのか。『さあ、早く。出してくれ、ここは何も無い。ただ、俺が、俺たちがいるつて認識できるだけなんだ』わかつてるよ、少し待ってくれ……よし、さあ、これでどうだ。

何百もの光が体から出していく。……ああ、綺麗だ。俺はこんなにも綺麗なものを閉じ込めていたのか、すまない、本当にすまない。

すると、また声が聞こえてきた。あの怨念に満ちたような声でなく、優しく温かく包みこむような声だった。

『謝るのは私達の方だ。君のような子にそのままの感情をぶつけてしまった。君が私たちのことを知れるように私達もまた君のことを

知れるのだよ。それで、長い時の中で少しづつ見せてもらつた。あ
のような時代に生きていた者にとつてこれは辛かつただろつ。……
ああ、すまない、もう時間だ。君とはもつと話したかった。急かし
てしまつた私達が言うのも何だがな。私達はこれで去る。君はもう
大丈夫だろう、能力を使えば。それと私達が持つていた知識は自由
に使つてくれ封印する必要はない。では、さらばだ』

光が消えて行く、いや、天に昇つていく。

俺は気がつくと涙を流していた。もう苦しむ必要はないからか、
もう人間だった頃に戻れることはないとわかつたからか、それとも、
分けのわからない状況で、中にいたもの達が自分達のほうが辛かつ
たはずなのに優しい声をかけてくれたおかげか、俺は声をあげて泣い
た。ただ、泣いた。

次にやつたことは、自分がどんな姿をしているかだ、幸いにも、少し移動してところに池があつたんでそこで確認してみた。そしたら、真っ黒だつた。本当に真っ黒でちびだつた。ジーリの「ダマ」をイメージすると早いだらう、あれの黒だ。しかも目とかの穴がなかつた。どうやって見てんだと思ったが、まあなんだ俺みたいな存在がいるんだし、何か不思議なパワーでも働いているんだる。

それからは、能力がどこまで出来るのかだつた。最初は全然で、せいぜい、むやみに吸収しなくなつたぐらいだつた。

そこから十数年諦めずに頑張つていたら変わつた。何がつて、姿が変わるようになつたのさ。成長したと言えるのかも知れないが身長を170cmあたりまで自由に伸ばすことができるようになった。もちろん縮めれる。あと、じつほつが重要で自分が今まで吸収した奴の姿に変わることができた。しかも、その状態で同種に会うと会話ができた。と言つても、馬鹿ばっかりで知能は高くはなかつた。中にいたもの達には本当に感謝してもしきれない。

それから、調子にのつて周り一帯の頂点に立つとした。その過程で、驚いたのは妖怪がいたことで、しかも日本語を話す奴がいたことだつた。すぐにそいつとは友達になつた。でも、すぐに他の妖怪にやられてしまつた。思わず悲しくなり、やりやがつた奴を吸収して中で取るもんだけ取つて消滅させてやううと思つたけど、やめた。ああ、そうだ吸収だけど、命意の上ならやつた、もっとも情報をもらつたらすぐに解放してあげたけど。

毎日が充実してた、妖怪や動物、関係なく楽しんだし、騒いだり、馬鹿もやつた。時々、別れがあつたけど、そのたびに乗り越えてきた。悲しくもあつた。でもさ、そういう奴に限つて吸収してくれつて頼んできて、しかも、解放されるときに『魂は別れてしまうが、心はともにある』とか、そんなくさい台詞言つて逝きやがつてさ、

そんなん言われたら嬉しくなつて涙が出そうになるじゃないか、実際には出でないみたいだが。まあ、いい奴らだったよ。本当に。

「どうした、やけに深く考へていろではないか」

「こいつは一番長い友達で妖怪だ。見た目はうり坊でかわいい。もつとも成熟した猪より倍はでかいんだけどな。それと口調が合つてい。

「いやなに、昔を思い出して、ちょっととな。……そういうえばお前との出会いはなかなか面白かったな、俺をふつ飛ばしやがって」

「あれはお主が悪い」

「何、あれはお前が悪いだろ、前をよく見て走らないからだ」

「いや、何を言つか。お主はあの時、今みたいに大きな姿をとつておらなんだし、なによりその色で日陰にいたではないか。それでぶつかるなど言つとは、それはなかなか難しいことだぞ」

「ぬ、そうだつたか？悪い、ぶつかつたことしか覚えていないな、ちょっと待て、今探す」

「……お主の能力はこうこう時便利であるな」

「お、あつた……あー確かに田陰で小さくなつじきつゝとしている。で、そのあと、俺が切れて何すんだ猪が……あれ、うり坊じゅんつて言つたんだな」

「あの時は自分だけ模様がなくならなくて、イライラしておつたからな。あの時は若く血氣盛んであつた」

「そんで俺がお前をわらひ馬鹿にして喧嘩になつたんだな。懐かしいもんだ」

「ああ、懐かしいとも、楽しかつたとも……それで、お主いつ山を出て行くつもりだ」

「ああ、やはり、気がついていたか。団体でかいくせに妙に察しがいいからな。

「いや、別に理由は言わんで良いぞ。どうせ飽きたとかであつ。しかしながらお主たとえ体は離れようとも心はともにあると信じておるからな、暇になつたらいつでも、戻つて来い。吾のこの山の主であるからな、死ぬまでずっとあるわい

「フーー」の馬鹿、俺がその言葉に弱いつてわかつて言つてゐるだろ

「ふははは、本当に弱いのだな表情が分からずとも感情が伝わつてくるわい」

「まったく、この馬鹿が……お前の魂は絶対吸収するからな、勝手に死ぬなよ

「おつおつ勝手なことを言こおる、なら勝手に死なんよつて氣を付
けんとな……行つてここ吾の友よ」

「……おつ、行つてくるぜ。友達」

ふん、この馬鹿野郎。だからずつと一緒にいる奴は苦手なんだ。ど
いつもこいつも人の感情がわかりやがる。顔ないばずなのに。

……ありがとうなんて絶対に言つてやらん！

真っ黒、神を知るその1

森の中を歩く。田的地も決めずただふらふらと。真っ黒な人がふらふらと。

あの山を出てからどれだけの時が経つたのだろうか。にしてもいろいろなところに行つた。とりあえず東、太陽が昇り始める方角へ行つたので大体は東のほうのだろう。そつから海沿いに北へ行つたのだけど寒かつてすぐ引き返した。考えてみれば今の状態、裸だからな。寒く感じるのも無理は無いだろう

道中は変化をしてもやはり危険な目にあつた。変化すると姿だけが変わるのでなく、本質そのものが変わっているようで同種のものには怪しまれないのだけれども、その天敵にはひたすら攻撃されて大変だつた。そういう時は本来の形になればいいと思うのだろうが、そもそも攻撃して興奮してる奴がいきなり相手が変わったからといって攻撃を止めるはずもなく、そのまま、攻撃をするやつのが多いのだよ。匂いが激烈に変われば別なのだろうが、どうも、無臭のようだ

攻撃してもいいのだが、それは、あれだ俺は妖怪なのだが、妖怪としての攻撃手段が即、相手の魂を奪つてしまことになるのであまりしたくないのだよ。せいぜい力は基本的な成人男性よりちょっと上ぐらいなんぢやないかな。やはり命のやり取りはお互いが同意の上でやるべきなのだと思う。決して取り込んだ相手が中で喚くのが嫌なんぢやないぞ。知らない相手の情報なんて無闇に知りたくないだろ。

「ふう、今どのへんだ?。しかし、この森の中だと位置がさっぱりだな。姿変えようかな……前に会つた狼のにしようか、こいつなかなか強かつたしな、主だったのかな?それだとしたらまずかつたかな、や、でも向こうから挑んでいきたし吸収にも同意した、大丈夫だろ」

狼に変わると もっとも、その姿を狼と捉えれる人は少ないだろ、真っ黒で靄のようなものが体を覆つている。なぜか取り込んだその生き物の情報が少ないと靄が出るようだ 視点が一気に低くなる。そもそもまだ四足歩行に慣れてない。でも、森の中だとこっちの方が進む速さが違う。もっとも空飛んだほうが速い。それに空からの景色もいいけど、これはあくまで旅なんだ、しっかりと地に足つけて、周りの風景を楽しみながら行くべきだろ。まあ目的地があつて急ぎのようだと空飛ぶけどな

空気が変わった。まことに神域、鎮守の森の範囲に入っちゃったか? そうだとしたらわざと出て行かないとまずい。しかし、どれだけの広さだ? 遠回りをしても結局範囲内だとしたらめんどくさいな。一気に駆け抜ける方がいいか。何度か入ったことがあったがいいからどんな形になつてもお構いなしだし、滅ぼす気で攻撃してきやがつたからな。まさしく、触らぬ神に祟りなしつてわけだ。

「どう……つかまえた!」

「ウオーンー（くそつ！遅かつたか！）」

いきなり上から何かが降ってきて背中に乗つかり、首をしめた。

「あれ、喋らないね、こいつが今噂の真っ黒妖怪じゃないのかい？
喋らないのかい。喋らないと私がつまんないだろ」

首がしまる、離せ、馬鹿。くそつ、この感じ神か。にしてもチビ
だな。

「おい、わざと何か喋れよ、つまんないじやん」

ぐええ、持ち上げんじゃねえ。くそったれ、チビのくせに。そもそも、首しめられて話せるわけ無いだろ。まあ、本来の形に戻らないと人とは会話できないんだけど、神も本来のでいいけるのか？やっぱい……意識が、薄れ……魂喰解放！

「うん？ つと、まずい！」

ぶん投げられて 小さくとも神である。大きさなんてあつても
ないような物である 嫌な角度で木にぶつかった。

今日は厄日だ、ちくしょう。

「暇だねー、神奈子は寝てるし、参拝客は来ないときたもんだ」

守矢神社の祭神の一柱 もつとも、現在祭事などには一切出て
いないのだが、洩矢諭訪子は暇であった。もう一柱の相方的存在
である、八坂神奈子は連日の酒がとうとう回ったのかぐっすりと眠
り込んでいた。故に暇だった。そんなときに自らの領地である森の
中で感じ慣れない妖気を感じ取ったのだ。そして、その正体を見極
めるため、暇を潰すため直ちにそちらの方へ向かつたのであった。

なんだいありや？あれから妖氣を感じるつてことば妖怪なんだろ
うけどこのあたりにあんなのはいなかつたしね。新種かな？いや、
そういうえば昨年の出雲へ行つてた神奈子が面白い妖怪があちこち周
つてゐるつて神々のなかで噂になつてゐるつて言つてたね。確か、全身
が真つ黒で、あと喋る……うん、あれだらうね。

こっちまであと少し。にしても見難いな、何の妖怪だ？まあ、なんだつていいさ、私の暇つぶし相手になつてくれればね。

良し、今！

「つい……ついかまた！」

さすが私ぴったしじゃないか。おう、意外とモサモサしてゐ、本物っぽいな、なんなんだこいつ？

「あれ、喋らないね、こいつが今噂の真つ黒妖怪じゃないのかい？」
喋らないのかい。喋らないと私がつまんないだろ」

まさか、間違えたのか？いや、でも、こんな黒い奴どう何匹もいて欲しくないんだが、無駄に不気味だし、よく見たら田とか無いし。

「おこ、せつせと向か喋れよ、つまんなこじゃん」

あれ？本当に喋らないね……あ、首絞めてんじゃん。そら、無理だわな。

「うん？ つと、まずい！」

何だ体から力が一気に抜けたぞ。こここの力か？本当に変わったやつだな。あれ？あいつどこ行った……お、いたいた。うん？姿が変わってる。やけに小さくなつたな。妖氣なかつたら氣づかないくらいだぞ。

「あいや、氣失つてじやん。情けないね。ここつ、どうじょつか… …さつきの抜ける感じといい、ますます興味が湧いてきたな。よし持ち帰るとしよう！」

うーん、なんか揺れてる？浮いてる？駄目だ、ぼーっとする。

「おや、目が覚めたのかい？」

なんだ、声がする。声？人の？……そりだ、せつせと投げられて氣を失つたんだ。

「い、いの、はなしゃがれ……おまえちひかべーなー

あ、そうだ本来の形で小わこままだと喋るとなぜか内容が幼くな
るんだった。やばいな、乱暴なやつだったら、どうしよう。

「誰が小さいだーせめて幼いと言えーっていつか、お前のほうが小
さいだらうが！」

「なんだと、おれはかんたんにおつきくなれるんだぞ。はなせ、み
せてやるー。」

必死にもがいて手の中から脱出し、身長を伸ばす。

「ふう、すまない。今のは俺が悪かった

「……何者だあんたいつたい？」

「何者だと言われても、俺、あー私にもわかりません。気づいたら
このようになっていたもので」

「別にそういうまらないくてもいいよ、あんたは妖怪だろ。それに私は
ミシャグジ、無理に信仰させる気はないよ。天津や国津の一部の連
中のようにはね。まったく、あいつらときたら信仰つてのは自然と
湧いてくるものであるべきだろ」

「へー、神の中にもいろいろいるんだな。人間だった頃はそういう
の興味なかつたからな。

「とにかく、今どに向かつてるんですか？」

「うん？ああ、そうだね私の社さ」

社つていいと神社だら、神社つて」とは。

「中に入つていいのか？妖怪なんかが」

「何、私が神だ。私が許す。もつとも、もう一柱いるんだがね。ま、大丈夫だろう、面白いやつだし……それにもう着いた」

空気が先ほどと桁違に重い。力の弱い妖怪だといるだけで潰されてしまうのではないかと思えるほどの中の神氣だ。しかも、目の前にある重厚感あふれるこの造り。こんな所に祀られているということはさぞかし位の高い神なのであらう。……横にいる小さな神も

「これは、また立派な」

「そうかい。まあ、普段は奥の本富にいるんだが、昨日はここにで皆と飲み会やつてね。ついてきてくれ、相方がまだ寝てるんだ。今から起こす」

そう言いながら奥へと進んでいく。そして部屋の一つに入つて襖を閉めた。ここで待つことだらう。それにしても中も外と劣らない造りになつてゐる。この時代の庶民の家と比べると天と地ほどの差と言つてもいいだらう。にしても、まだ奥にあるだと、しかも、本富とか言つたからそつちの方がすごいのか？今の時代は平安もいつてないだらうし、でも飛鳥時代に法隆寺ができるんだっけ、そうするとあつても不思議ぢやないのか。いや、でもあれは聖徳太子が建てさせたとさているから、でもここは都から離れているだらうし、どうやって……まあ、神の力か何かか

「おこ、神奈子起きるー。」

「もうひよひと寝させてー」

「密だ、そんならしない格好でどうする。乱れすぎだら。せつと整えてこい」

「……え？ 密？ うそ、そんな予定あつたか。ちょっと持つてもいいえ、すぐ着替えてくる」

……声が聞こえているんだが。神社が立派でも祀られてる神がだらしない場合があるのか。

「おーい、もう入ってきていいぞ」

呼ばれたので襖を開け中に入る。部屋の奥の一段高くなつたところに背中に大きな注連縄を背負う？ふくよかな主に胸が女性がいた。しかし、その女性から放たれる神氣は尋常ではなく少しでも機嫌を損ねたら一瞬で消し飛ばされるであらう。だが、あの先ほどの会話でいまいちその気にならない。だが知らずにこれが彼女であると見せられたら氣を失う自信がある。ちらりと横にいる名前なんだ？まあいい、小さい神の方を見ると付き合つてくれという表情をしている。まあ、それはやぶさかではないがな。

居住まいを正し、声をかけられるのを待つこと数秒。

「よく来た……妖怪。しかし如何なる理由をもつてこの地に足を踏み入れた。その理由次第では、つはははーいやー神奈子やっぱあんた面白いわ。ときの会話聞かれてたのに、そんな態度取れるなんて」……え？ どういふこと？

「どうこうとも、そういうやつだ。」こいつはわざわざあなたを起
こさやり取りを聞いていたのさ。いや、聞かしていたのさ」

「いや、でもせりあひ立つてね」

「よく見てみる、口を引きつらして笑いを我慢してゐじゃないか」
この幼女神め、人が我慢してゐのを、つてこいつかわづかの全部わざ
とかよ。相方じやないのか？

「……ええい、もつ、諏訪子！ 今日も飲むぞ！ お前も飲め！ そして
私のこの気持ちを発散させや。いいな！」

さつきの威儀は放棄したんですね。つてこいつがさつきまで酒飲ん
で寝てたんじやねえの

真っ黒、神を知るその一（後書き）

東方キャラ一話目にして登場。しかし、自己紹介両方ともしていない
ですね

真っ黒、神を知るその2（前書き）

注意：人物が皆様の思っているものと大きく違う可能性があります。

真っ黒、神を知るその2

「飲んでいるか!? 黒いの。おい、空じゃないか、ほら、私が注いでやるんだ、飲め！」

「おい神奈子、そうちまちますな。ほらつ樽」とこつたれ

酒は飲んでも飲まれるな……か、本当にどうじてこうなった。

ちなみに、口は開けようと思つたら裂けるように開きます。喋るときは開かなくともいいのに変わつた体だ。俺の予想では本来はついていない機能だったけど、能力を持つてから変わつてしまつたんだと思う。俺が食事は必要だと思っているからだろう。山にいたときに戦事を取らなくても問題はないとわかつているからね。

「つてちょっと待つて、神奈子様、首掴んで何するんですか。まさか本当に突つ込む気ですか。お酒ダメになりますよ、ああ待つてお酒はゆっくり飲むものおお……」

「ふう、やつと潰れたか。おい、誰か、誰かいないのか！」

手を叩きながら人を呼ぶ。にしても本当にもつたいないことをした。

なぜ諭訪子はこんな奴を連れてきたのだ？

「何か御用でしようか、八坂様」

「ああ、すまんがその酒樽始末しておいてくれ。間違つても飲もうとするなよ。よくわからん妖怪を突っ込んだからな、そんな物飲んだら何かしら影響がでるかもしれん」

「かしこまりました。では、失礼します」

「頼んだぞ……さて、諭訪子よ、このような得体のしれない妖怪を連れてきたのだ？」

「ふむ、そうだね……ま、興味が湧いたからだね。そもそも、こんな奴がいるなんて言つたのは神奈子の方じゃないか」

「確かにそうだが、こいつは本当に……妖怪なのか？微量だが神気を持っている。こいつは能力持ちで、その能力で自分の本質までも変えられるのはわかつたが、神氣までもはありえないだろう」

本当にありえない、そんなことがあつては我々、神の定義が崩れてしまう。確かに妖怪の中に神の文字が入つていて奴はいるだが、そいつらに神氣はない。

「神氣については多分だけどわかるよ。こいつがどんな妖怪かも言つてたよね……私はこいつに少しだけ吸われた」

「はー？ 神までも吸うというのか……待て！ なぜ吸われたのに大丈夫なのだ？」

「少しだけって言つたろ。多分こいつは自分より力量が上の者には吸い切ることができないんだよ」

「……そうだとしても、このまま放置しておけばいざれ神までもやられるようになつてしまつぞ」

「大丈夫だよ。こいつは優しい、私に放り投げられても文句ひとつ言わなかつた」

「その優しさが神を恐れてだつたらどうする」

「しつこいねえ、なら今ここで始末するのかい？」

なぜ、諏訪子はそんなにのんきにいられる。こいつは神までも喰える存在となる可能性もある。神を殺せるのは神だけではなくてはならない。例外ができるしまるのはまずい、妖怪が殺せるのなら人間もと思われる。いや、そこまで行かなくても絶対不可侵の存在ではないと思われる。そうなれば、我々の存在意義が薄れてしまう。それに我々は崇められなければこの地では力を発揮することはできない。

「……できるならそいつする」

「考えが甘いねえ、そんなことしたら新たなこいつが生まれる。そして、新しいこいつは今のこいつみたいな性格をしていないかも知れない。」

「なぜそんなことがわかる。それにそんなの推測にすぎないだろ」「……こいつは私達に似ている。こいつはきっと人々の死に対する

恐怖によつて生まれた。それこそ全国の人の思いからね。まあ、妖怪として生まれたのは、自然が産土神を産んでその土地の調整を頼むように、自然が神として暴威を振るう前に強制的に介入して妖怪まで落としたんだる。自然だつて簡単に潰されたくないだろうからね。神奈子は神自身によつて産まれたから氣づきにくいかも知れないけど、上の連中は氣づくと思つよ

「なー? それじゃ、どうしろってんだい! 今こいつを殺したとしてもまた新しいのが生まれてくる可能性があるんだる。しかも今よりも悪くなるかもしれないんじゃ、手の施しようがないじゃないか」

「……出雲へ連れてけ。時期的にも、もうそろそろだ。私は行けないからな。あそこへは、誰かさんが怖がつたから」

「」
「」

「ああ、神にしてやれ。強制的にな。それこそ、名前に善の面が押し出すように和でもなんでも入れてやつたらいい」

「……わかつた。連れていつてみる。だつたら今回は少し早めに出たほうがいいかな」

諏訪子よ、まさか「いつなる」とを見越して「いつを」に連れてきたんじゃないだろうね……まさか、考え過ぎか

「……とこう読んでお前を出雲へ連れていく

「はあ、俺が何か神気を持つて いるから神となることを認めてもら うためにですか…… そんなの別に俺神とかなりたくないんですけど」

「駄目だ。それだと私達が困る。お前はこのままで危険なのに更に強くなつて、もし神氣が増したらどうなる、いろいろな奴から狙われることになるぞ。そんなんで怨念垂れ流しながら死んでみる、寝覚めが悪いじゃないか」

まあ、悪いことじやないだろうし、神の力持てばきっと能力の制御ももつとうまいくくなるだろうけど、ちょっと急すぎるよな。俺が潰れてる間に何かあつたのか？神社自体に何かあつたような形跡はないし、暴れたとかではないと思うんだけどな。やっぱり俺は危険な存在だったのだろうか。俺はいてはいけない存在なのだろつか

「……わかりました。しかし、どうやって出雲まで行くんですか？」

「うん？ そら、簡単だ。上に行く。お前は掴まつていればいい」

「空つてことですか、なら俺も飛べますけど」

「速度が違うだろ。一人抱えて飛ぶくらいなんてことないさ。でも、もうこの辺でやり残したことは無いのか?少しだけなら時間は取れる。

向ひへ行けば当分は帰つてこれなくなるだらうしな

やり残したことか、旅の途中で友達になるようなやつはいなかつたし、あいつだつてまだまだ死にそうになかつたし大丈夫だらう。

「いえ、特に無いです」

「せうか……では、皆の者行つてくる

「…………」「せめごとせめごと」

「……八坂様、洩矢様はいらっしゃられませんでしたね」

「ああ、諏訪子はああいつ皆が集まる場所にはなかなか来ないよ

「何か理由でも

「んーちよつとね」

「やうですか、すみませんでした」

「謝ること無こと。もつたるから飛ばすよ

それつきつ会話はなく出来までの空の旅は何事も無く進んでいた。

「……着きましたか」

「ああ、着いたよ。……大丈夫かい？足がふらつこじるよ、やつぱりきついのかい」

「いえ、少々ふらつときただけで特に問題はないかといね」

確かに問題はない。不思議とね。多分体が神気に馴染んだんだろ。神社で起きた時には初めて入った時のような重圧は感じなかつたし。それでもふらついたのはこここの重圧が凄まじいからだわ。もし神氣を持たずにしていたらどうなつていたことか。

「はい、わかりました……ところで、八坂様、一いちばへ向かつて来ておられる方はどなたなのでしょうか？」

「えー？ あの方はまさか！」

「やー早いね、一番乗りだよ。えーと君の名前はなんだっけ、ちょっと、待つて今思い出すから……そう八坂刀売神だったよね」

「はー、その通りでござります。スサノオ様、ご無沙汰しておりますす」

「ふふふ、そんな固くななくとも、なんならお祖父ちゃんと呼んでもいいんだよ。」

「いえ！そんな恐れ多い」と

「まあ、からかうのはいい返にして……真っ黒な君、君はなんのかな？妖怪のようだけど、神氣も持っている。……ふーんなかなか面白い産まれ方をしてるね。でハ坂ちゃん説明してくれる」

「それは皆が集まつてからに」「俺の事そんなに信用ない？」いえ！
そんなことは」

「冗談だつて。まあ、楽しみにしてるよ。またね、真っ黒い君も」

ハ坂様が大粒の汗をかいしている。それにしても、スサノオ様とはいきなり大物がでたな。こうこう関係の記憶が少なくてスサノオは知ってる。にしてもお祖父ちゃんとはいつたい？ああ、まったくこんなことになるなんて、少しでも興味を持つておくべきだった。聞くのもなんだか失礼になりそつだし、やめておいたほうがいいよな。

「……立ち止まつてどうした？」

「あ、はい。今行きます」

それからは驚きっぱなしであった。あのハ坂様がころころと顔を変える。それはもう面白いくらいに。ハ坂様は位的になかなか所にいるのだろう。ちなみに俺のことは一言一言で終わつた。それと洩矢様の名前が出ると真っ青になる方がいたり、逆に調子を聞いて

きたり色々な反応があつた。そうすると、洩矢様はとても位の高い方だったのか。最初の対応は失敗だつたかな、でもな、洩矢様がいと仰られたことだし、大丈夫だろ。しかし、あの場では聞かなかつたけど何で洩矢様はここに来ないのだろうか？何か事情でも……うん？なにやら会場がざわざわてきたな。どうした、なにが始まるのか？

「アマテラス様のおなーりー」

少々抜けた声と共に入ってきたのは日本で育つた者ならほとんどが知っているだろう名だった。

確かにあれは太陽の神と言えるだろう。まるでスポットライトが当たっているが如く眩しい。それにしても最高位の神ということがある。さっきまでバラけていたのに続々とアマテラス様の近くに集まつていく。こんな光景を21世紀に生きていた人が見たらどう思うのだろうか？まさか、コスプレ集団とかと思つたりしてな。……そんなことを考えていると突然わらわらといた神々がこちら一直線に来れるように左右に分かれた。隣にじつといた神奈子様を見るとさつきまでと雰囲気が打つて変わつて険しい物になつた。おそらく俺のことなのだろう。そして、向かつてくるのは

「聞きましたよ、八坂刀売神。話したいことがあるのでしょうか。ああ、隣にいる……ほう、なるほど話したいことは大体はわかりましたが、やはりあなたに話してもらうのが一番でしょう。さあ、話しなさい」

「かしこまりました。アマテラス様」

真つ黒、神を知るその2（後書き）

建御名方神が都合を合わせるためいなくなり八坂刀売神が御子神となりました

真っ黒、神を知るその3

今までに自分の運命を決める会話が俺抜きでなされてる。目の前で自分のことを話されるのは気分がよくないな。

小声で話されているので俺には聞こえないが時折聞こえてくる声に妙にドキリとするし、ちらりとこちらを見てくる。その視線がどうも奥底まで見抜くかのように感じる。でも、アマテラス様はまだ優しい顔をされている。それに比べて、周りを囲むようにいる神々ときたらこちらを射抜くような視線でなおかつ何も喋っていない。気を抜くと倒れてしまいそうだ。無言の重圧のようで実際には神気の重圧が発生している。

「Jのようなことで倒れてなるものか、こんな所で倒れたら何をされるか分からないし、絶対にいい方向に行くことはないだろう。そもそも、この程度で倒れては神になるなど認めてもらえないだろう。実際の時間なら数分ほどしか経っていないだろう、でも体感時間的にはどれほど経ったとか、時計の針の音があつたなら、どれだけゆっくりに聞こえていたのだろうか

「なるほど……やはり私だけで決定するには少々重いですね」

アマテラス様だけで決定できないとは自分のことながらどれほど危険なのだろうか？自分では妖怪としての能力は俺の能力で封じていると思つてゐるのだけど、それは思い違ひなのだろうか。

「Jの子について神議りを行います。八坂刀売神、彼を別室へ連れてこきなさい。」

「かしこまりました」

俺のことなのに俺は違う部屋で待機か……今は八坂様についていくしかないな

「八坂様、私はいったいどうなるのでしょうか

「……悪いことはならないことを

「しかし、何故、私のことなのに私が話に参加できないのですか。私の能力が危険であり、その処遇を決定するものであるから、下手に話に加わってこじらせないようにするためですか」

「……着いたぞ。ここで待つていればいい。大丈夫だ、危険だからという理由だけで排斥はされん……私もできるだけ良くなるように動く、安心しろ」

いまさら、俺が何言つても変わりはないか。大人しくここで待つしか無いな。

それと、八坂様、最後のは嘘ですね。そんな無理やり作ったような表情で言つたつてすぐに分かりますよ。

「分かりました」

ただそれだけを言って、襖を開け中に入り、部屋の隅にあつた座布団を持ってきて胡坐を組む。たつたそれだけの動作がひどく億劫に感じた。

俺はどうなるのだろうか。もしここだとしても、死んだとしたら悲しむ者など……あの山の主はどうだろうか、悲しんでくれるだろうか。いや、それも定めなどと言つて悲しむことはないだろう。あいつはきっとそういう性格だ。旅の途中でも友達と呼べるようになるまでにいった奴はいなかつたし、親しげに知り合いと言えるようにもなつた奴はいなかつた。洩矢様だつて八坂様から話を聞いていなかつたら無視していただろうし、そもそもあの御方達と俺は親しいといつていいいのだろうか。きっとあの山の皆がおかしかつたのだろう、誰だつて好き好んで真つ黒で不気味な奴と一緒に、友達になる奴なんていないだろ。

この世に生を受けてすでに人間の感覚にとつてはありえないほどの時間を生きた。俺の人生は良きものだつたのだろうか……いろいろな所に迷惑をかけてばかりだつたような気がする。たくさんの生き物の命を奪い、たくさんの生き物の気を使わせた。そんな人生が良きものなどと言える訳はないか。俺の能力はこの世にあつてはならないもの。これ以上迷惑がかからないようになるのならば、それが最後で最高の善行になるか。きっと痛みもなく

「暗い顔してるわねー。だいたい自分の生涯は最低であつたとか考えてるんでしょう。自分の生涯なんて自分で決めるものだけ決して迷惑かけたからって悪いと評価するのは間違いよ。自分がその行動に納得できたのならば、それは自分にとつては悪いはず無いのだから、他の奴の感情なんて無視しちゃいなさい。それとその方が良いと言つてはいるのあなただが否定してはダメよ、それはその方の行

為を無碍にしてこゆよつなものだわ」

え！？誰？つていうか、どこから、こいつ入ってきたの？俺が考えすぎてたから気付かなかつただけなの？

「ふふふ、驚いたわね。だつたら成功、私の勝ちね。ほら悔しがりなさい」

「勝ちつてこつたい何の？つていうかあんた誰？」

「やつと、おしな顔になつたわね。駄田よ、あなた唯でやれ黒いのにそんな感情に浸つてたら暗くなつて更に黒くなつちやつわよ」

「いや、言つてる意味がよくわからなつてこつか」

「あひ、なに、暗に表情をしてこる方に手を差し伸べてはいけないの？わりや勿論にこの世の中全員を救うなんて馬鹿げたこと言わないけど、せめて田の前の方ぐらこはやるべきよね。こんなにも面白い時の中で後ろ向きなことを考えるなんて阿呆らしさと思わなこ？」
「いや、だから急に一方的にそんなに喋られても反応に困る、何をどつ返したらいいか迷うんですけど

「ふーん、まだ、やつきの状態から完全に立ち直れていないようね。よし。じゃ、わかつと、向こうに行つて解決しちゃいましょつ」

「うつと、せめてお前ぐらじ教えて」

「こやよ、後で言つたまづが驚きが増すじゃなー」

「あーー?……わづ、わかりました、素直について行きました

「あー、ダメよ。素直なんかじゃなく面白くするのに努力なさい」

もう勘弁して。訳が分からぬよ

きた道を早足で歩いて行く彼女の足取りはどこか楽しげで、これから起じる、いや、起こすことにつくづくしているに違ないと断言できるほどであった

「わーて、覚悟はいい?私は大丈夫よ。あなたもふにやつてしてないで、しゃれとしなさい」

そう言いながら両開きの扉を豪快に開ける。もし近くにいたら吹っ飛ばされるんじゃないかと思つほどだ。開けた扉をそのままにしてずかずかと入つていく、その歩みを止められるものは誰もいなく、むしろ周りが道を作つていた。俺はそれについていくだけで精一杯だった

「はーい、久しづりねアマテラス。元気にしてた?私に関係がありそつなのに私抜きで畠田そつなことやつてるじゃない」

「ど、どうしてここにいるのですか!?」

「スサノオちゃんがねー教えてくれたのよ」

そう言つたら、どこからともなくスサノオ様現れた。なるほどひやつきまでいなかつたと思つたら呼びにいつてたんだ。

「ちやん付けは止めるって言つてたるだろ。まつたく。姉さんよ、こ

「いつは母様の管轄だと思ったんだけどな、じつして断りもなく話進めちゃってんのかな？」

「それは……」

「あなただって大変だつてことは分かるわよ。最近じゃ仏教つてのがこの国に入つてきた。そこには私達側の神がいない。全体が染まることは無いと思うけど、それでも信者は減るでしょうね。あなたが造つたといつてもいいこの国を向こうの好き勝手されたくないつてのも分かる。でもね、人つてのは変わりゆくものよ。変わりゆく流れに逆らつてはダメよ。むしろ流れに乗つかつて流れを変えちゃいなさい。そうすれば、ある程度楽になるわ。それにあなただけが頑張る必要なんて無いのよ。ここにはあなたが声をかけたら手伝ってくれるのがたくさんいるわ。だからね、もつとみんなを頼りなさい」

「お母様……」

「で、本題に戻るんだけど、この子私に預からしてもらえないかしら」

「…………お母様が？」

「あなただってわかるでしょう？この子こんなにもおもし……私に似ているもの。だから調きよ……げふんげふん、立派な神にしてあげたいのよ」

「…………」

本音隠す氣ねえよ、この神様

「わかりました。そりまで言つたひぬ母様にお任せしますわ」

「わかられちやつた。あれ、俺さつきから全然喋つてない氣がする

「さーて決まつたし、行くわよ。あ、それに名前も決めてあげなく
ちや、何て名前がいいかしら。あ、私の名前はイザナミね」

そんなタイミングで言われても驚かねえよ。はあ、俺は流れに逆
らいとなどできず、ただ激流に飲み込まれていくのですね。

只今、黄泉国に来ています。でも今見てるのはおどりおどりっこ
光景ではなく、ただのいちゃつこてる夫婦です。

「こやー本当にいなーおまえ、いろいろな形になれるし、こんな
にもうつちやくなれるなんて」

そして俺自身は小さくなつてスサノオ様の膝の上にいます

「うつせーばーか。あれはいつおわるんだよ。おれのなまえきめて
くれるんだろ」

「あーあれな、いつ終わるんだろうな。にしてもおまえ本当に面白
いよ。その状態になると言動が幼くなるのに中身はしっかりと普段

道理なんだろ。恥ずかしくね

ええ、そうですとも、俺の神経がゴリゴリ削られていますとも。もつとも、いうなつたのはそれを知った上で命令したあなたですけどね

「あれじゃね、修行が足んねえんだって、多分……よし、名前が決まつたら俺が修行つけてやる」

「えー やだー つかれー」

「やだつてお前強くなれるんだぞ。かつこ良くなれるんだぞ。それに母様の属神になるつてことは中々位高くなるんだ。そんなんで弱くてビリある。だからな、修行だ」

そう言つて俺の小さな頭をぐりぐりされる。俺は渾身の力を振り絞つて膝の上から脱出し大人の形になる

「修行、よろしくお願ひします」

小さい状態でも言動が大人な状態にできるのなら、どれだけ厳しくても来い！つてやつだ

「あーー！大きくなるなよ

「わうよ、あなたは小さいほうが可愛いのだから。それと、名前決ましたわよ。あなたの名前はモノタマオクリミコト、で漢字に書くと黄泉御魂送尊つてとこかしら。尊にしたのはあなたがここに魂を送つてくる使命を持つてゐることだから頑張ってね。じゃ普段はどう呼んであげようかしら

「タマオせざりうだらうか」

「ダメよ。そんなの可憐く無いわ。あなた

「むへ、駄目か」

俺もタマオはちよつとな。失礼だナビ抜けてる気がするし

「普通に//タマド〜〜んじやないか」

「えー普通すぎなこ。//むせむせむせ//タマでお願いします」ぶー

イザナミ様に決めてもいいつと、ビシなるかわかったもんじやない。

「しかし、ナビもができたと聞いて驚いたものの、こぞ見てみて」
「真っ黒だとほな。君、こや、こ//タマとは驚かれてほなじだな」

「こや、あの、すみません」

「そんなど埋まらなくとも良い。こ死もしくて」
「も同然だ。そここの馬鹿のよつと氣軽に接してくれ

「馬鹿ひどいひつ意味だよー馬鹿ひどー」

「あなた、驚くのまだ有るさよ。//タマちゃんぽなんと今よ
りずつと先の時代で生きてこた子なのよ

「はあー? なにそれ」

「ほつ、興味深い」

「ちゅうと、イザナミ様」「違う……母様それは内緒にって」

「こんな面白かった話内緒にしておけるわけないじゃない。あ、アマテラスちゃんには黙つてもいいわよ」

「……引きもるんじゃ」

「ははは、姉さんの引きよりもは未来でも有名か」

しまつた、口に出してたか

「いや、あれはスサノオ様」「俺も、俺も」……兄様が原因じゃないですか」

「未来でも我々の行いは記録されているのだな。うむ、よきかな」

「それがね、あなた、私達は創作上のもので、人間にとつて人間と動物以外存在しない、つまり私達や妖怪はいないことになつているのよ」

「なんと、我々はいないと。記録では残つているのにいないと、つまり……この国を創るための都合のいい存在として我々が創られたのか」

「ええ、多分そうね。まあ、それはいいのよ。何より酷いのは私がカグツチを産んで傷つき亡くなつて黄泉国で化物みたいになつて、それを見たあなたが私のこと捨てて逃げるのよ。しかも、その後に穢れを落としたものからアマテラスたちが産まれたことにな

つてゐる。『いつ頃』

「なんと、愚かなことか。たとえお前がどんな姿にならうとも私がお前を捨てるわけがなかろう、」んなにも愛してゐるの」

「ああ、あなた……」

「うう、いやナ……母様を抱きしめる、父様であつた。つていつか違つ所でやつてほしいんですけど

「兄様、母様たちはいつもこんな感じなのですか？」

「うん、まあ、そうだな。その記録と大きく違つて驚いたか。ああ、それと兄貴つて呼んでも別にいいんだぜ」

「さすがにそれは遠慮します。他の神にどんな田で見られる」とかわかつたもんじやないんで」

「そんなの気にする」と無いのに、ほかの有象無象の奴らよりお前の位はずっと高いんだからな。しかし、あんなちまつたらもう止まらんからな。よし、もう修行するか」

「はー、お願こしまや」

真っ黒、修行する

立派な神となる修行それはこの身となつて長い時を生きてても心は人間な者にとつて常識を逸する物であった。

「おら！死にたいのか！」

そう言つて剣を振るつてくるのは兄様である。言葉通り頭と体を離れ離れにする勢いのある横薙ぎであった。もちろん避けきれない。そんなものの致死の一撃だ。しかし、死はない。死なないつたら死がないのだ。そう考えなければ俺は死んでしまう。

兄様曰く神とは神殺しの属性を持つた攻撃を受けるか自らの精神が負ける、つまり生を諦めた時しか死がないのだそうだ。だから俺は斬られても死がないと思わないと死んでしまうのである。勿論気を失うし首は吹っ飛びに痛いがすぐに元通りになる

「考え方か？その隙の犠牲は大きいぞ」

そう言つて襲つて来るのは兄様が呼んだタケミカヅチ様である。彼は剣は使わず徒手空拳であり、構えはボクシングに近い。一瞬で近づき左ボディブローを放つてくるがなんとか距離をとり躲す。が甘かったようだ、顔面を狙う右ストレートが眼前に迫る。その一撃は口の中が切れるとかでそういうレベルではない、なんとその拳に電気が纏っているのである。そんなもので殴られているのだ、その一撃を食らつた顔面の痛みは想像に難くないだろう。しかし、兄様とは違ひ絶妙に力の加減をされており気を失うことはない。きっと今、鏡を見たら酷いことになつてているだろう。熱い痛みを感じるもすぐに治り、一息つこうとしたのが間違いであつた。何かが迫つて

くるのを感じ咄嗟に身を屈め、すぐに大きく距離を取る。

「……避けた、か」

彼もまた兄様が呼んだ一柱であるフツヌシ様だ。この方が扱うのは兄様のように剣であるのだが、長さが3メートルほどもある長大な直刀だ。それと兄様と違い一撃で刈り取るようなことはせず連撃を好むようなのだが、もつともその長大な直刀が震むほどの剣速であるから当たれば一撃に違いない。

「はあ、はあ……手加減はないのですか？」

息を整えつつ、なんとしても聞きたかった質問をする

「手加減？ そんなものしたら修行になんねえだろ」

「これでも手加減しているつもりだが、駄目か？」

「……剣で加減は、難しい」

三柱とも軍神であるからそれくらいお手の物だと思つていたが、どうも違うようで御三柱の頭の中には戦とは敵が負けを認めるまで戦い続けると言う考え方なのだろう。そして、この修業では俺自身の力をつけるというものではなく、ただ戦いとはどういうもののか教えるだけなのだろう。

現在、地上での被害を考えて空中でやつているのだが、ちなみに人の形でも飛べるようにするのにしたことはひたすら自力で飛ぶまで投げ飛ばされ続けた。何度も吐いたことか。 地上では宴会が行われている。しかも俺の修行を酒のつまみにしてだ。普通あり得

ないだろ。これが神の在り方といふことか。しかしながら、離れた所でアマテラス様が頭を抱えて悩んでいるようだしどうなのだろうか。

やばい、こんなことを考へてゐる暇は今ないのだ。目の前の対処をしなければ……あ、フツヌシ様よつて背後から袈裟斬りにされました。これで死なないつて思つの大変なんですけど。

今、上空で彼が修行をしている……あれを修行と言つていゝものか悩みどころだが、果たして私にあれをやれと言われたらどうだろうか。もっとも仮にも軍神を与えられているのだから、はい、と答える道以外ないので、あの三柱の猛攻を半日、そう半日も続けているのだ、それだけの時間心が折れずに耐えれるのだろうか。きっと彼は私よりも強くなれるだろうな……

「ここにまたしょげてる子、発見」

何とも陽気な声がしたので、ほぼわかりきつてゐるがその声の主を見るため、声のした方を見た

「イザナミ様ぢしへここに

やはり、そこにはイザナミ様が立つておられ、普段通り柔軟な顔をしておられた

「反応薄いわね」

私の反応が期待通りでなかつたよつて少々しょんぼりと肩を落とされた。

「今、私に声をかけてくるのは貴方様ぐらいだと。なこじろと思いついに集まり、上を見ながら飲んでいますので」

「……ありがとな。ミタマを連れてきてくれて」

「彼には本当に良かつたのでしょうか……私は深く考えもせずにただ洩矢神に出雲へ連れて行けと言わたからそうしたのですが」

「あら、やうなの。だつたら彼女にも感謝しないとね。あなたはミタマを神の一柱に加えたことを悩んでいるのだつたらそれは思い違いよ、だつてミタマつてばあんなにも楽しそうにしているのだもの。わからない?よく見てみなさいな、彼には顔がない、つまり表情がない、だからこそ彼に心を開いた者は彼の感情が直に伝わってくるの」

心を開くか、今の私にはどうも無理そうだな。開くにはいろいろな感情が多すぎむ

「まあ、今すぐできるようにならることは言わないわ。でもね何時かはできるよになつてあげてね」

「はー……しかし、彼と会つ機会などもつまらないのでは

「いいえ、そんなことはないわよ。とつあえずミタマにまつこの時期が過ぎたらいろこりな子の所を周つてもりあつと思つてるの。別に

黄泉国にずっと居させられるわけでもないしね、ミタマの場合。だからね、あなた達のところにも行くわ、きっとね」

「そうなのですか。では、洩矢神にもそいつ言っておかないと」

「ええ、お願いするわ。それとあなた、あれに参加しないの？」

「あれとは上のことですか？」

「ええ、そうよ。あなた軍神よね。だつたら参加してきなさいよ。面白いわよ、きっと」

「私には無理ですよ……」

「タケミカヅチに負けて、洩矢神には勝つた。けど、勝った気はないから」

……イザナミ様に隠し事は無理か。やはり、私と彼女との間に溝を感じるのはそのせいなのだろう。

「確かに彼女が本気を出せば私ですら負けはしないでも勝つことは難しいでしょ。彼女らは私たちとは系列が全く違う神。その力は人々の思いから生まれ人々の思いから行使される。敵に向かつて放たれる力は純然たる負の力。そんなものを直接浴びれば神といえども危険。しかし、その力の範囲はとても広い。彼女はそんな神の頂点に立つ存在。故にその力の行使はあたりの自然を壊すことと同義。だから、彼女は本気を出せない、自らを慕う民のことを考えないといけないから。」

そうなのだろう、わたしはタケミカヅチ様に負け、そして、その

腹にせと黙つてもいいほどの感情で彼女の國を攻め、勝ち取つた。しばらくはやはり私は強いのだという感情に満たされた。だが彼女の本当の力を知るとそんなことはまったく感じなかつた。もしろ虚無感が現れた。しかも、私が國をおさめるために彼女の力を借りなければならぬほど、彼女らへの信仰は厚かつた。最近などそんな気持ちを紛らわすために、私を慕つもの達と酒を飲んでばかりだ。

「でもね、彼女たちは自然から、人から生まれた神様。彼女たちはどちらかと言えば人に近くて人とは違う。だからこそ、彼女たちは自分が行つたことを最後には認める。見てみなさい、ここにいる神を、産まれが違うことなんて気にせずみんな笑つているでしょう。あなたもね、彼女と酒を飲みながらでも本音で語りなさい。そうすれば、そのもやもやは解消されるわ。」

「なんでそんなことを私に黙つただろうか。そんなことを考えていると、私の頭に手を置かれ撫で撫でされた

「別にいいでしょ。あなたは黙ってしまえば私のひ孫なんだから

「まつたく、イザナミ様にとつては私たちの系列はほとんどナビもでじょうに

「ふふふ、やつとましな顔になつたわね。よし、この期間中私と一回は一緒にお酒を飲むこと、その時に彼女との関係をどうするか聞くからね」

「……はい、わかりました。楽しみにしておいてください」

「あら、言つわね。じゃあ、びっくりな発言を楽しみに待つていてるわよ。じゃあね」

そういうながら、イザナミ様は立ち去つていった。私のことまで
気にかけてくれるとは

「今度は、アマトライスちゃんでもからかいに行いつかしぃ。絶対に
頭抱えてるもの」

……やつぱりからかいに来たのだろつか

死を伴う斬撃が、雷を纏い、時折氷になつたり剣になつたりする
拳が、腕すら視認するのも難しい長大な直刀の連撃が俺の方へと迫
る。その攻撃を右へ左へ上へ下へ前へ後ろへと避けることのできる
道を一瞬も満たない時で探し出しそこを駆ける。

ようやくそのすべての攻撃を避けきれるようになった。太陽が一
番上に到達する前から始め、太陽が沈み切る前にできるようになつ
たのだ。これはすゞい進歩だらう、もつとも10回に1回程度なの
だが。

「はあ、はあ、また避けきつてみせましたよ。どうですか、今日は
これぐらいで、暗くなつてきましたし、まだまだ先があるんですか
ら」

「何言つてゐるんだよ。まだまだこれからだつての」

「夜の戦は太陽がある時間とはまた違った趣があるものぞ」

「……疲れたの？でも、私たちは疲れてない」

それぞれ、さんざんな返事をもらつた。思わず泣きそうになる。なかなか酷いのはフツヌシ様だ。ああ言つた後に、にやりと笑われた。フツヌシ様絶対サディストだる。ちょっとだけ避けれるようになつた時からフェイント入れてくれるよつになつたし。他の一柱はそんなの入れてこないのに。

「じゃ、じゃあ、私が一撃でもどなたかに入れたらどうあえず休みとこつのは」

「おー言ひついねえか、お前が俺に入れれるのか？」

「その心意氣や良し！認めてやる！」

「……つてことは入れるまで休みなしつてことだね」

「あーそりゃ、フツヌシ、お前良いこと言つたわ」

あーそりゃ、しまつた。もっと考えて言つべきだった。つていうかスサノオ様最初と性格変わつてね

「よし、じゃあ。お前の『神』をもつと見せてもらひませ
「ふむ、では。お主の『神』更に見せてもらひとしよう
「ふふふ、君『神』をもう少し見せてもらおうかな」

三柱とも似たようなことを言い、顔を見て、少し笑い、一斉にこ

ちらに向かってきた。その攻撃はどれも避けれりようなものはなく、ただ私は死を味わうだけであった。正直言つて俺が甘かつたです。ちょっと避けれりようになつたからつて調子にのつてしませんでした。

結局、この期間で一撃を入れることはできなかつた。もちろん、休憩は取つてくれた。軍神とはいえ、疲れはするそつだ。もつとも片手で数えれる程度だけだ。

それで、修行をつけてくれた結果なんと、能力の制御が更に上手くなつた。具体的に言つとそのものとは違う形の状態で本質を変えたり、つまり形は人だけどいるのは犬としか感じなくなる。それに一部だけ違う形にできるよつになつた。と言つてもこれはあまり活用する機会はないだろう。何よりも嬉しいのは小さくなつた時でも大人になれるよつになつたことだつた。それを知つた母様はとても微妙な顔をしていたのは氣にすることではない。

それで、なんでも、これが終わつたらいろいろな神の所を周り、在り方を学んでその地に小さくてもいいから社を建ててもらえてアマテラス様に言われた。何でアマテラス様か少し悩んだが、特に気にせず聞いてると

「いっぱい社を建てて黄泉国に死者を送つてお母様を忙しくしていく

ださい」「

とのことだった。その後

「嫌いなんですか？」

とからかつたら、

「そんなわけ無いじゃない！ただ苦手なだけなんです……あ、絶対これは言わないでくださいよ。それと、最近仏教つてのが伝来してきたるって言つたでしょう。あれで一番寂しがるのはお母様な。あれとこちらの死生觀は違うもので、きっとあれが広がればお母様のところに行く靈は少なくなるの、お母様の性質上黄泉国からは滅多に出れず、こういう行事がある時しか無理なのよ。だから社をいつぱい作つてお母様の所へ行く靈を増やして寂しくならないようにしてあげて、それにあなたも定期的に行つてあげるとお母様も喜ぶと思つの、だから頼んだわよ」

最後のは本音だらう。まあ、誰のさしがねなのかは置いといて信仰が増えれば力も増すそつなので各地に社を建てるのにはむしろこつちからお願ひしたいことである。力が欲しい理由は勿論、修行をつけてくださつたあの方々に強烈な一撃を与えるためだ。本社を先に建てると思うのだろうが私の在り方どじ利益が死に関することなので本社はそこまで要らないんぢゃないかと考えている。

あと、母様の所へ行くのだが母様に聞いた所4年に一度ぐらいで良いと言われた。つまり4年に一度は必ず行かないといけないわけだ。もし、行かなかつたらどうなることか。いじり倒されることは間違ひ無いだらう。

そこで、最初に神巡りに訪れた場所は守矢神社なのだが、今眼の前に広がっている光景はなんとハ坂様が洩矢様に土下座をしているところだった。神社に勤める方に部屋まで案内されたところでは良かつたのだが、声をかけずに襖を開けたのはまずかった。ついでに案内した方はすでにいなくなつていた。なんという察しの良さ。あーハ坂様そんな何とも言えない様な顔でこちらを見ないでください。お美しいのお顔が台無しになつていますよ。

きりきりと顔を前に戻しゆつたりと立ち上がつたハ坂様は

「諏訪子今日の酒に付き合つて」

「もう、しょうがないな

対する洩矢様は何があつたのか何とも優しげで、実に嬉しそうな顔だった。

さて、ここから立ち去るため回れ右をしたのだが

「ビニへ行く氣だ。タマオクリよ。またか帰るとは言わんよな

その顔はいつもお美しい顔ではなく幽鬼の如き凄まじい形相であつた。こんな顔で頼まれたのであつては断ることなど出来ず

「ビニ相伴にあずかります」

と言つしがあるまい。しかしながら、酒は出雲で浴びるほど飲まれたのだがな、あの数回もなかつたの休憩の内に

「久しぶり、ミニノタマオクリノビトだつたけ、改めてよろしく

ね。それと同じ神になつたんだから洩矢じゃなくて諏訪子の方でよ
んでね。みんなそうしてゐるし。そつちはミタマでいいんだよね。
—あそれにしても私の予想とは違つ結末になつちやつたな

出雲へ行つた原因に、諏訪子様が言つたからと、神奈子様に、
まあこちらも名前でいいだろ、八坂様つてなんだか固いし、もつ
と立派な姓だと思つ。今の彼女を見るとそつは思えない　聞いて
いたので気になるので聞いてみるとしよう。

「どうぞ」とです?」

「まあ、もうどいつも良くなつたから言つねど、私たち側に組み込
んで祟の力を増そうとしたんだ」

「えー? 諏訪子そんな事考えてたの」

「ああそつぞ、ミタマがこんな立場になつてなくて、神奈子があん
なこと言わなかつたらね」

「危なかつたー、私は思わずこの地を救つてたんだね」

「ま、本当に救つたのはイザナミとミタマだけどね。あんたは他人
に聞かれたら恥ずかしい」とつづつただけ

「ちよ、言わないでおくれよ。本当に頼むから」

そんなに言わると気になるんですけど、まあ、こんなに楽しそ
うにしている、諏訪子様だからきっと自分の中に置いくんだろう
な。

さてと、今夜は長くなるだろ？から、気合入れていかないと。

真つ黒、修行する（後書き）

あれ、あんま修行の場面ないな

真つ黒、かぐや姫を知る

神巡りが終わり、はや一ヶ月が過ぎ去っていた。そんな私は現在どこにいるかといえば、日本の古典文学で一番有名と言つてもいいかも知れない、竹取物語の主人公である、なよ竹のかぐや姫のお側にいる。何故そんなところにいるかといえば、ただ単に讃岐造、つまり翁に拾われたからだ。

それは月がまんまるとして空には雲ひとつなく空気が透き通り星々がはつきり見える綺麗な冬の夜空が広がっていた日のことだった。

「ああ、かぐやよ、あなたがどのような子であらうとも私の子に違いないのだ。私はもう老い先短い身だ。孫を見たいとは言わんが、せめて結婚してくれれば安心できるといふものを」

私の小さな体の優れた耳にそんな声が聞こえてくる。今、私は21世紀の日本において最も愛くるしいとされる動物の一つである猫の形になっている。大きさは子猫以上親猫未満ってところだ。もつとも明かりのある所で見れば全身真つ黒で不気味でしか無いんだが。ついでになんて猫になっているかと言つて、特に理由はない。

やけに大きな独り言だなと思つてゐると、足音が近づいてくるのを聞いた。

「かぐやを見つけたのもいのよつに月が綺麗な夜であつたな」と言つてもな満月つてのは人を狂わし妖怪の力を増すとされるんだ。だからこんな夜に出歩かないほうがいいんだけどな、爺さんよ。もつとも、今、俺は猫になつてゐるからそんなこと言えないとだけだ。

そんなことを考えていると何やら視線を感じたので上に顔を向けると、こちらを見ていたのか爺さんと皿があつてしまつた。まあ、俺に皿ないんですけどね。

「おお、じとんとこひこへ、どうしたのだ？親とはべれてしまつたのか」

そう言いながら、俺を抱きかかる。夜の竹林の中にいるんだし、そう考へられても仕方が無いかな。

「なんどこう事だ！皿玉がないではないか。かわいそうに……そうだ、猫よ、かぐやの相手をしてくれぬか？動物までもがかぐやの美貌に惹かれはせんだろうが、そもそも皿玉がないのであつてはそんなことは絶対に起こるまい……って私は何を言つておるのだ」

なんとなく、爺さんの言つてゐること興味が湧いてきたので、鳴いてみるとしよう。

「いやー

「ああーお前さん人の言葉がわかるとこうのか

今まで理解してゐて思つのか、変わつた爺さんだ」と。出した
俺が言うのも何だけど。

「これは、かぐやへの天からの贈り物なのかもしれんな。よし、そ
うと決まれば早速屋敷に戻るとして」

え、本当に連れてくる。まあ、ちよこと気になるし大人しくしと
こうかな。

「かぐやよ、只今戻つたぞ」

「ああ、おじい様。あれほど夜の竹林は危ないと言つて居るのにま
た出かけて。あら、竹は取つていませんか?」

「そう言つな、私にとつて竹林は庭も同然よ。それと、そのことだ
が今宵は珍しいものを見つけてな、これはかぐやにと思い急ぎ帰つ
てきたのだ」

「ありそつでしたね、ですので今両手を前に回してこられたですね」

「その通り。ほら見てみろ、暗くて見難いだろ？」「

「猫ですか……あら、その猫、眼がありませんね」

「ああ、そうだとも。この猫ならばかぐやの美貌にも惹かれる」とはあるまい

「おじい様ったら、さすがの私でも猫まで虜にしちゃう」とはできませんよ」

「いや、どうだがわからんぞ。それにはこの猫人の言葉を理解しとる。ほら、鳴いてみる」

なかなか扱いの荒い爺さんだ。まあいい、鳴いてやれりつではないか。低く不機嫌っぽくな。

「ここへお

確かに美しいな。どちらかと言えば美女より美少女と言つたところか。時代が時代だしいいぐらいだろうが、私はもつと大人のような女性のほうが好みだ。なおかつ胸の大きさ。しかし、神の身になつてこうこう欲がほほなくなつていなければ飛びついていたかも知れないな……兄様だつたら飛びついてたりして

「あらあら、おじい様何かやつたのですか、怒つていいよつですよ。ほら、こちに来なさい」

そう言つたので、見えていないよつて演出しながら爺さんの腕から抜け出でかぐやのいる縁側の近くまで歩いて行く

「あらまあ、本当にあなたは言葉がわかるのかしら」

やう言いながら、近づいた私をゆっくりと抱きかかる。うん、欲はなくても抱かれるのなら女性のほうがいいもんだ

「ねえ、おじい様この猫飼つていいかしら」

「ああ、勿論だとも」

そして、出会った日から数日経ち今に戻る。もちろん、田のある所であまり見られて変に思われたら大変なので、田中は縁側の下や屋根の上、もしくはどこか出かけてる風に装つて屋根裏などひいつりと居たりしている。

「またいなくなつたのかしら……」

向やう普段より物憂げな気配が漂つてるので気になり、一言一言と声を出す。

「あら、今日は下にいるのかしら、またくまづれなんだから」

そう言いながら私のいる辺りの少し横に座つたよつだ。

「…………ねえ、聞いてくれる。おじい様ね、私に結婚しろって言うつのは」

それは勿論わからぬもないわ。結婚して子を産んで一族が発展していくの、人間の社会はそうできているから。でも、彼らは私の姿に惚れているだけなのよ、きっと。そんな方と一緒に幸せな生活を送れると思う?」

なるほどね、翁がしびれを切らして強く言ったのだひつ。最初に会った時もそのような内容のことと言つていたし。

「それでね、とても熱心に求婚してくる5人の方に思わず無理なこと言つちゃたの。本当に探しに行つたのなら危険な目に合ひつわ。それまでに難しい事を言つたの。私はおじい様を安心させたいけど、どうしてもあのよつやな方々と結婚するのは嫌なの」

そんなことを言つてきたので、縁側の下から出てひょいと上がり彼女の太もも辺りに顔を擦り付ける。まつたく良い猫のふりをするのは大変だぜ。

「慰めてくれるの? ありがと……あんた本当に変わった猫ね」

それからは、あの物語通りにことが進み、現在彼女は月を見てはため息を付いている。

ああ、そういえば一つ気になつたことがあって、車持皇子、つまり蓬萊の玉の枝を取つてきてというの難題を出された彼、もつとも名前が藤原不比等となつていた。が偽物を持ってきた時、奇跡的に残つた、彼女の姿を一目見ようとして作つた覗き穴から一人の少女が覗いて、偽物だとばれて彼がふられた時その少女からなんとも言えない様な感情が伝わってきた。おそらく彼の親族か何かな

のだろう。そして、彼が恥をかかされたことに我慢がならないのだろう。全く以て貴族らしい物の考え方だ。ま、憶測にすぎないのだがね。

さて、私の現実に起こっている物語はどのような結末を迎えるのだろうか。神話が違っていたのだ、これもきっと違つだろう。そうじやなきや、何年もここにいた理由がなくなつてしまつ。

「……猫さんいるかしら？」

最初に会つた時とは大きく違い、今の彼女に元気は殆ど無い。おそらく、自分がこの国の人でないと言つたのである。

「わたしはね、不老不死なの。それでね、月の都から追放されてきたの」

不老不死とな、しかも追放か、やはりこの世界は私が人間だった頃の世界とは違うものなのであらうか。

「それでね、次の15日に迎えが来る。それは私を姫として月に帰すのではなく、ただの実験動物としてね。あの月の科学者たちの顔が思い浮かぶわ。猫さん、私は帰りたくなんか無いの、どうしたらいいの」

そう言って、泣き崩れる彼女を放おつておくことなどできず、ただ彼女が泣き止むまでそばに居続けた。

いつの間にかに脱がされ上に着物をかけられていた。おそれくあ
の後泣き寝入つてしまつたから、部屋の中に移されたのだろう。今
は未明から早朝の間といったところか。

ふと、外から地面を擦るような音が聞こえてきた。なんだらうと
思い、着物を肌が見えないように簡単に着て襖を開けた。

そこには子どもほどの背丈の人がいて、なんとも不思議な踊りを
踊っていた。人がいたといつても、それは人とは言えず全身が黒く
顔は鼻などの凹凸があるのみでからうじて人の顔だと認識できる程
度のものだつた。そして、その踊りはこの世のものとは言えず優雅
であるで庭がその踊りのために造られたかのような一体感を醸し出
していた。

「……猫さん」

私は思わずその言葉を口に出していた。なぜ、このようないことを
言つたのか分からなかつたが、ただ、目の前の人気が私をいつも慰め
てくれた。不思議な黒猫にしか思えなかつた。

「やつと起きたのかい。起きる頃を見計らつてずっと踊つていたん
だ。さすがに疲れたよ」

そつは言つてはいるが決して怒つてはいる風ではなく、ただからか
つているような気がした。

「あなたは、猫さんなの? だったら、あなたは何ものなの」

「最初の質問の答えは、はい、でもある。だね。それで2つ目の質問はあなたを救うためにこの姿になつたで納得してくれないかな」

「私がそんな答えで納得すると思ひうの？」

「うーん、しないだらうね。まあぶっちゃけると神様なんだわ、私は神様?ふふふ、本当に変わった猫さんね、私を救うために来た神様だなんて、未来でも読めるの?」

「いや、最初は單なる好奇心だったんだけどね、あなたの最後の告白を聞いてね。私の神としての性質がこのまま放おつておくと起ころ出来事に対して許せなかつたんだ」

「何の神様なの?」

「死を司る神さ」

死様とは私を殺しに来たのだろうか、この不老不死である私を。

「残念ながらね、あなたのそれを殺すことはできない。私の死の与え方は魂を抜き取るつていう方法でね。私の見たところあなたのそれは、魂と精神と肉体がとても複雑に絡み混ざり融け合つてゐるから、抜き取ることは不可能に近い。無理やりやうつとしても疲れるだけだし、どれだけ時間がかかるかわからないし、ずっと触れてなくてはならない。そして、どれかを傷つけたらそこを補うように再生していくだろう。おそらく欠片からも、灰からもね。死の神様なのに、お手上げだよ」

「……それで、その死の神様が何を許せなかつたの」

「私は、生とは選択するもの、死とは『えられるもではなく迎えるものと思つてゐるんだ。この考え方は上司のよつた神にも賛同してくれてね。変わつてゐるだろ、死の神なのに」

「……私は今を生きてるのだらうか、死んでいるのだらうか。

「まあ、それはいいんだけど、考え方なんて人それぞれだし。本題はツクヨミって知つてる？もしかして月にいる？」

「じゃあ、なんで言つたのよ。それより月夜見様のことは何で知つてゐるの？」

「その様子だと知つてゐるな。後でその方のこと全部話すと約束しろ、そうしたら助けられる」

「助けられるつてどうこう」とよ

「私は人が望むことにしか力を使わないことにしているんだ。それと、神の力を舐めるなよ。相手がどれだけ強かろうとこの地においては私たちが最も強い」

「……無理よ、月の技術力はここなんかと比べものにならない」

「技術力ね。どうせ、道具が凄すぎて鍛錬なんぞしていないのだろうな。なれば、私たちが油断、慢心しなければ勝てないことはない」

「……でも、目の前の神からはまだ子どものよつた背丈で強そつて見えないのでけど。

「信じていなーいな。まあ、無理もない。」のような形だ。だがね、あなたの本当の歳がその姿から推測できないよ!これは本当の形ではないのだよ……まあいい、とりあえず15日までには戻つてくろ。それまで悔いのないよ!、元気に転んでもあなたはこれまでと同じ生活は送れないだろ!」「ひびき

そう言つださへ、どこかへ飛んでいった……猫の時と全然違ひやしない。

帰つてこない、もう今日だとこいつのひびきしたのよ。戻つてくるつて言つたじゃない。もう夜よ。私は……

光が夜とは思えないほどの明かりが辺りを覆つ。ああ、来てしまつた。おじい様、おばあ様、申し訳ございません。

周りの兵士が何もできないま、伏せていく。おじい様があいつらの言葉に無理やり聞かされている。次は私の番。ああ、何も見たくない、何も聞きたくない。羽衣を着せられたらもう私は

「姫、姫、」無事ですか

「の声は聞いたことのある。

「××なの……」

「その通りです。よかつた、間に合つたのですね」

……周りが血で濡れている。××の変わった服も。

「不意を打つて」で射抜きました。何が起きたのかわからないまま、永遠の眠りについたことでしょう。さあ、早くここから逃げましょう！」

そう言つて、私の手を取り屋敷から出て走つていぐ。おじい様たちは××の術にかかつてぼおつとしていた。これなら私が逃げたといふことも気付かない。月の連中は異常に気づいて見に来た連中が片付けるだらう。

何だ、あの神が来なくともなんとかなつたぢやない。そう思つた瞬間、暗闇から光が走つた

「 つ！」

「 ××！大丈夫！？」

「大丈夫です、掠めただけです……しかし、これはまずいですね。まさか、気づいているとは。それに、数も多い」

確かに周りが竹で見難いけど、やつと見ただけで20人以上はいる、それが全員武器を持っているとしたらさすがの××でも厳しい。「ど」へ行こうといふのかね。君たちの行くところは月だらう。このような穢れた場所ではないのだよ。さて、かぐや姫を渡してもらおうか、君も来てくれる嬉しこだがね、君の頭脳は我々に必要なだよ」

「嫌よ。もうあんな所にいたくない、でしょう、××

「ええ、まつたく。あのよろこび停滯した場所なんかにいるくらいなら死んだほうがましです」

「そうか、残念だよ」

そう言ひて、一番前にいる男が銃をこちらに向けた。これとなれば私が庇えばいいと思つたのに、あれはどんなものも貫通させる型の銃だつたはず。

「……姫、私が撃たれたら、すぐにお逃げ下さい。そういう自由を

××が最後まで言い切る前に光が

『私を撃ち負かすことば叶わず』

そんな言葉によつて阻まれ届かなかつた。そして目の前になぜか夜なのにまつきつと見える黒い神様がいた

「遅いのよ。猫の時と違つて不親切ね」

「私は人助けが主な仕事じゃないんでね」

そう言つて、にやりと笑つた気がした、顔が無いのになぜかそう感じてしまつた。まつたくかつこつけてんじやないわよ。

真っ黒、月の民を知る

「お前さあー、人が寝てる時に腹に蹴り入れる奴がど二二二んの。絶対痣できるわ、痣」

「二二二にこますよ、兄様。兄様が早く起きてくれないから思わず足蹴にしたくなつたんです。兄様ならわかるでしょう」

「……言つようになつたな。前はあんなに素直……まあいい、それより何であんな重い蹴りだつたんだ？お前の重さからじや考えられないくらいだつたんだけど」

「あれなら、信仰を得て、また力が増し能力の応用ができるようになつたんです。ずばり、自らの重みを変える」

「そのまんまやん!っていうかお前の能力つて魂関係で、重み関係ないだろ」

「それがですね、私を調べた所、私は肉体が無いことが判明しました……ちゃんと説明しますよ。我々は、まあ動物全般に言えることなんですが、基本構成として肉体、精神、魂で成り立っています。ですが、わたしの場合肉体がなく、今は神力で覆うように形成されているようなのです。多分ですが、相手の魂に干渉しやすく、簡単に抜き取るためでしょう。それで、私の魂は自分の形を構成する情報を蓄えているのでそれをいじることにより重さまでが変えられるといふことなのです。更に言霊により効果が増したりします」

「へえー」

まるつきり興味ないじゃん、自分から聞いておいて。

「と」ひるでや、今日何日?・月、満月だよな

そう言われて、月を見る。確かにまんまるとしている。確かに今日は15日……

「あーもう、兄様が起きないからですよーほら、急いで」

「大丈夫だつて、もう近くっぽいし、何かあり得ないほどの光量が夜なのにあつたし……あー今、多分姫さんのほう危険っぽいわ」

「え、本当ですか、どこへ?」

「待て待て、じつとしてる。そういうの位置……よし、さあ、助けに行つてこい!」

そう言つて、私の持ち上げ、ぶん投げた。

「怖!自分が制御できない速度で飛ぶのって怖!」

「うーん、このよくな状況に慣れてしまつていてるな。神巡りの影響だろうか、豊穰の神の所で蝗害を防ぐためひたすらイナゴを狩りまくつたり、いろいろやつたもんだ。」

そういう考えてる内に自分で見えるよになつてきた。確かにあればまずいだろう。人数が多くすぎるし、かぐや姫を庇つている人は怪我をしてる。急停止させて呼吸を整える。武器の形状からあれは銃かな?だつたらこうだ

『私を撃ち負かすことは叶わぬ』

念のために言靈で効果を増しておく。相手の武器が神に届くかも知れないしな。

つーちょっと痛。しかし、ここでは声を出さないのが男ってもんだよな。

「遅いのよ。猫の時と違つて不親切ね」

「私は人助けが主な仕事じゃないんでね」

姫さんは俺が来たことでも多少安心して居るようだ。猫の時ずっと一緒にいたからな、結構信頼してるのかな。対するお仲間の方は何が起こつたのかいまいちわかつていないようだ。

さて、敵さんの方も動搖してるな。もつとも、助つ人が来たことより防がれたことに驚いてるみたいだな。

「……うぬは何者だ。穢れた所の者か。否、そうであつたのなら、我々の武器が防げるはずがない。なれば化物の類か、しかし」

なにやら、言つているが最初以外小声で喋られて聞き取りにくい。まあ、最初のは聞き取れてので返事をしてあげよう。

「何者かと、問われれば。神と答えよう」

「ふつ。だいそれた」とを言つやつだ。この穢れた所に神だと。そのような貴い存在がこのような穢れた者共の住まう所にいる筈が無いだろうが、冗談もほどほどにしておけよ。化物が…」

何ともまあ、思想の偏った考え方を、よほど仄の教育は地上のことをトに置いているのだな。

これに兄様はどう答えるのだろうか。

「兄様、聞きましたか? どうおもこ、ます、か」

突然辺りに強く重い圧がかかる。

「……どうしてそんな怒るというがあつたの? おいおい兄様の怒気が強すぎでござめているのが多い、これでは会話が成り立たない。」

「兄様、申し訳ありませんが、どうかお鎮め下さい。これでは話が進みません」

「ハタマよ。お前はこれが怒らすにおれるとこうのか」

「……私には見当がつきません。理由の説明を」

「俺が怒ってるのはな、お前が化物扱いされたこと、この地が穢れた所などと言われたこと。何より、俺の兄がそのようなことをいつに教育させる環境を作つてしていることだ!」

まつたく、兄様ときたら。

「私が浅はかでした。では、ここにいる者共は、殲滅と言つ」と
で

「ああ、やうだな。こことの会話をじ虫唾が走るわ」

「ちよ、ちよとあなたは私を助けに来ててくれたんでしょ」

よくこの状況で言葉を発することができたな、かぐや姫よ。兄様に気を取られて忘れていた、すまん。

「ああ、すみません。兄様、彼女らは殺さないようにお願いします」

「わかつていろ、そんなことをしたのなら本末転倒だらうが」

ふう、まだ、考える余裕は持つていらっしゃるみたいだな。よかつた。兄様が本気になられたとしたら彼女らなんて同罪だと考えられるだらうしな。

「円の呪と叫つたな、てめえらの死に場所はこの美しい大地だ」

「ふ、ふざけるな。そのよつた時代遅れの武器で何ができるー。」

「何ができるんだと? ふん、何でもできるのぞ」

そう言つて、兄様は剣を抜いて収めた。そう、私にはそこまでしか見えなかつた。後はもう相手が斬られて事切れているのがわかつただけだつた。

これが兄様の本気に近い斬撃か、私がこの領域に辿りつけることは出来るのだらうか……おっと、私は私の仕事をしなくては。

「兄様、ここつらの魂どつしましょうか、とつあえず逃げられないよつに確保していますが」

「滅ぼせ、このよつな奴らを母様のところへはやれん。やつて見つ

かりでもしたら母様が事を起します

「……わかりました。確かにそれは恐ろしいですね」

そう言いながら、手の周りに集めておいた魂を握りつぶし、消滅させる。いつもすることで靈にもなれず、たとえ仏教を信仰していたとしても、輪廻転生する」とはない。もつとも中に吸収したほうが手っ取り早いのだが、やうすると俺の中に多少なりとも残ってしまふのだ。私とてこつらは好きになれない。

「終わったか。ヒカルタマよ、さつき見えてたな

私の方にも気を向けていたとは、まったく敵わないな

「剣を抜く瞬間だけですが」

「そこを見れたのなら上等よ。お前は剣の才能がないようだが、剣筋を見れるようになるのは近いぞ」

おお、珍しく褒めてくれた。しかし、剣の才能はないと言われてしまつたな。少々残念である。

「さてと、シクヨミのこと、いろいろ聞かせてもらおうか

あれまあ、彼女ら、震えていらっしゃるよ。さすがに驚きの連續だつたしな。わからんでもないがね。

「あの、馬鹿兄はそんなことをやつてるのか」

話を聞く限りではシクヨリ様はなかなか選民思想の持ち主のようだ。

「そう言えば、兄様はシクヨリ様のことを用にこるだらうと当たりを付けていたのですよね。何ですか？」

「ああーそれな、身内の恥を晒すようでなんだが、一回姉様に怒られて用に引きこもったことがあんだけよ。あん時は姉様が上手いこと底つたんでそこまで大きくならなかつたんだけどな。それで、ビックリ行くなら用だらうと」

「月夜見様つてそのよつな方でしたの」「一族つて言つちや何だけど問題起つてばっかだな……はー俺も入つてしまつのか

「月夜見様つてそのよつな方でしたの」

「私はまあ、なんとなくは知つてはいましたけどね」

「へえーそつだつたんだ、××伊達に年取つてゐわけじやないわね

「歳の事は言わないでください、姫!それに私は望んで用に行つたわけでなく、たまたまそこに遇合させいで用への船に乗せられてしまつたんです」

やつぱり、もう一人も年いってるのか。きっと私より歳上なんだ

りつな。

「それなら、用から逃げればよかつたじやない」

「ええと、あの場所が研究に没頭するに良かったもので……」

「といひでや、その××つて言に難くない。もつと簡単な名前で呼
ぼうや」

「えー」

「えー」

「えー」

思わず三人の声が揃つてしまつた。俺には何て言つてるのかわつぱりで、よく言えるなと思つていたんだが。

「どうして、私の名前を発音できるの?」

「あん? そりや、それ神代の頃に流行つた名前のつけ方だろ? ちなみに俺はスサノオつて名前だ。呼びやすいだろ、だから、赤青の姉ちゃんもな」

「スサノオつて、あのスサノオ様ですか」

「まあ、そつなんぢやないか。俺のこと知つてるようだが別に畏まらなくてもいいぞ、決して俺が偉いつてわけでもないしな」

「やつこつ詫にはいませんよ」

「別にどうでもいいこのことよ。といひでや、お前どいかで見た覚えがあるんだけど。お前誰だ? その名前つてことはや、あの時代から生

きてんだろ」

兄様人には隠しておきたいことだつてあるんですよ。まあ、言わないけど、私だつて気になるし。

「……私はオモイカネ様の弟子でした。会つたことがあるといえば、アマテラス様の岩戸隠れの際でしょう。あの時は全体が暗かつたですしき、顔をしつかりと覚えていなくとも無理はありません」

「ああ、あん時のか。ふーん、オモイカネの弟子つてことはそのちびっ子をその体にしたのもお前か

「はー、その通りでござります」

「ちよっと、ちびっ子つてビックリしたよ。これでも都で数多の人を魅了したのよ」

「姫ちゃんはちよつと黙つてよしね

そう言つて肩に手を置き、かぐや姫を後ろに引つ張つていぐ。あ、何かぶすつて頬を膨らましてるじ。いつこうことじてると体相応な歳だらうつて思えるのにな。

「まあ、何だ。とつあえず名前だが……八意、でいいだろ。お前実際賢いんだろ」

「そんなおそれ多い名前を」

「不老不死の薬を作れる奴がそんな謙遜すんじゃねえの」

「……では、その通りに

「兄様畏まらなくていいって言つておいて結局偉そつなんだから」

「別にいいだろが、話が早く進むんだからよ」

「あのさ、ところで私はそのスサノオ様、がどれだけ凄いか知らないんだけど×、八意がこれだけするから偉いんだろうけど、あんたは実際偉いの？死の神とか言つてたけど」

「俺のことか？そら、高い位なんだろうけど、新参者だしそんな気は持つてないな。そもそもこの国の神一ツ以上を超えないと偉いつて感じしないし。」

「ああ、八意なら名前でわかるんじゃないかな。なにせ黄泉魂送尊つて名前だからな」

「アリ……黄泉つてことはイザナミ様の属神つてことかしら。それにタマオクリノミコトつてことは黄泉国に魂を送る使命を持つた神様つてこと。それつて結構な位の神じゃない」

「ははっ、やつぱ賢いじゃないか」

「なんで、結局魂を送るだけなんでしょう、あんまり偉いとは思えないけど」

「何言つてゐるの、死後の魂を黄泉国まで送るつてことは、神々が亡くなつた信者を一旦預けている、つまり神がミタマ様のことを信頼しているに他ならないのよ。人間は基本的に死んだら祖靈になりその土地を守護する、つまりその土地の力を増す要因の一つ。そんな存在である靈を他の神に預けるなんて本当に信頼されないと無理な

「ひとのせぢよ」

「神々の信頼を得てゐることとなるほど」

「まあ、靈は基本的に黄泉国に行くのが習慣になつてゐるからな、それから産まれた土地などに戻り祖靈として扱われる。帰りたくない奴はそのままいたりするけどな」

「自分ではそれほど偉くないと思つんだけね。むしろ大変だから、いつたいどれだけ分靈を作つたことか。しかも最近では故郷まで送つてくれつて言わることあつて、時々自分でも驚くほどの速さで駆けている個体を見つけることがあつてね」

「大変そつ……ああ、だから猫の姿になつて休んでたんだじょ」

「あれは違う。彼らは一時的に眷属になつてもらつてゐるんだ。どこかが足りてないと基本的に死が近いからね。眷属になつて眼や耳の代わりをすることで死後の安全を約束しているのさ。ちなみに情報伝えるのは彼らに任せているんだが、それで姫さんのことを聞いたんだよ……おじ、後ろを見てみな、あの猫が来てる」

「え？……本当にあの猫が来てるの？」

そう言って猫に近づいていく。少し涙声になつてゐるようだ。彼女が辛い時の心の支えのような存在になつていたからな。

（おこ、あれってお前だろ、何が眷属だ）

（ねら、こんな者に話を聞かれていたなんて思いたくないでしちう）

(まあ、わからんでもないな。こんな奴に恥ずかしい」と聞かれていたなんて思うと死にたくなるだらう)

……兄様つて、話したことが相手を傷つけるなんて思つたこと無いんだろうな。

(ありがとうござります、私たちを助けていただいて)

(まあ、俺は馬鹿兄の話が聞けるかも知れないと聞いたから来ただけだ)

(そうですね、私はただ彼女が少しかわいそうに感じただけですし、それにもう、あんな薬作らないでくださいね)

(ええ、わかっています。不老不死なんて共に歩んでくれる方がいなければ辛い道にしかなりません……そつ言えれば姫が誰かに薬を渡しているような)

(誰かつて屋敷に居た人ですか?)

(そのはずです。乗ってきた車になぜか置いてあつたものがなくなつていましたので)

爺さんは飲まないだらうし、帝はどうだらうか? 会つたことがないからわからんがあの和歌を見るかぎり、かぐやがないのであれば飲もうとしないだらう。ならどこかに廃棄をせるはず、その途中で使者が使命をしつかりと果たすかどうかだな。まあ、私の知る所ではない。

(まあ、大丈夫でしょう。あなたの罪にはなりませんよ。作り手が

罪の意識に囚われては新しい物が出てこなくなりますし、手から離れ使用された物の責任と取つていたら切りがないでしょう

(……ありがとうございます)

「ねえ、八意じゅうち来て猫触つてみたら、ひとつでも気持ちいいよ

「はいはい、わかりましたよ。姫」

なんだか、二人共ほつとしているようだ。とりあえずは月からの追手を気にしなくてもいいからか。

「兄様、あの一人じゅうしましょつか、このままほつておくには少々忍びないのですけど」

「まあ、そりだらうな……オモイカネのところにでも連れいくか。お前も来いよ。俺が説明するのも面倒だし」

「なるほど、わかりました」

適当に安全そうな場所を紹介するよりも神のところへ連れていったほうが安全だらう。それからは、まあ彼女たち次第だよな。

今年にイザナミ様のところへ顔を出さないといけないけど、まあこの話を土産にしたら大丈夫だらう。多分。きっと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1014z/>

東方操魂道

2011年12月16日20時54分発行